

## 鳥類標識調査データを活用した「淀川口2級ステーション」の俯瞰

熊代直生

淀川口2級ステーションでは、1979年から2017年までの38年間の標識調査で14目45科133種が記録され、大阪府鳥類目録2016の概ね3分の1の種数となった。目視観察での記録が難しい小型フクロウ、センニュウ類、ホオジロ類については、標識放鳥の記録は鳥類相の記載において、貴重な情報源となる。標識記録のうち約3分の2を占める88種がスズメ目であり、陸生の小鳥が主対象となっている。カモ目やチドリ目といった水鳥は少なかった。水鳥はコアジサシやサギ類のコロニー調査で記録されたものが中心である。また、生息区分別にみると留鳥と夏鳥、陸鳥に限ると、旅鳥、冬鳥も比較的多くの種類が確認されているが、迷鳥に区分される種は、陸鳥、水鳥を問わず少なかった。

38年間の調査で56,237羽の鳥が標識放鳥された。ツバメ、メジロ、オオジュリン、コアジサシの順で放鳥数が多く、上位種は営巣地やねぐらなど、特定の目的をもって調査したもの（ツバメ、コアジサシ、ハクセキレイ等）と、特別な狙いはなくても多く捕れるもの（メジロ、アオジ、ウグイス等）が混在していた。

月別に見ると、種数は春秋の渡り時期には多くなるが、放鳥数は繁殖地やねぐらを対象とした調査に強く左右された。渡りの移動途中の大きな群れよりも、繁殖する特定の種、及び越冬種が主な対象であるようだ。

調査地点の環境を港湾、河川敷・草地、市街地・公園、山林の4区分に分類して集計した。港湾部では、夏季にコアジサシのコロニー調査にほぼ特化していた。河川敷・草地ではオオジュリンを主体とした秋の渡り時期に多く放鳥され、ツバメのねぐら調査オオヨシキリの繁殖調査が次いで大きな割合を占めた。市街地・公園の網場では、放鳥数ではツバメ、モズの営巣地調査、及びハクセキレイのねぐら調査などテーマ性のある調査が大多数を占める一方で、春と秋に渡り途中の鳥が各種標識されていた。山林ではテーマ的な調査が実施されておらず、月に一回等の定常的な調査が主体となり、渡りの時期の種数増加と、越冬期前期の冬鳥の放鳥数が合成された傾向を示した。

リピート率はコゲラやカラ類のように定住性が高い種や、なわばりを確保する鳥、繁殖地やねぐら、安定した餌場を調査対象とした場合に高くなった。リターン率は調査目的や実施状況で左右されるが、帰巣するツバメなど夏鳥だけでなく、越冬する冬鳥でも高いものがあつた。リカバリー率は、ヨシ原のように生息環境が局所的に分布する種で高かつた。

淀川口2級ステーションのように調査形態が多岐にわたるステーションは、そのままではモニタリング的なデータ活用は困難である。しかし、調査目的や調査形態が特化した調査地点がある一方で、山林や都市公園などで多く実施される定常的な標識調査の継続は、繁殖分布変化や外来種の分布拡大のような現象をよく反映していた。

山林や都市公園における長期間持続可能な調査地と、淀川口としての特殊性を写すヨシ原や港湾部等のテーマ調査という、2つの側面によって淀川口2級ステーションは特徴づけられた。

表 淀川口2級ステーションにおける各環境の網場と実績

網場環境	網場数	放鳥数		実施年数		主要な対象種
		最大値	合計	平均値	最長	
港湾	6	3,349	4,390	4.2	10	コアジサシ
河川敷・草地	27	7,342	16,985	4.7	20	オオジュリン、ツバメ、アオジ、オオヨシキリ
市街地・公園	28	4,813	13,715	5.6	29	ツバメ、ハクセキレイ、モズ
山林	28	7,285	21,247	7.4	27	メジロ、アオジ、シジュウカラ、ヤマガラ
計	89	7,342	56,337	5.8	29	

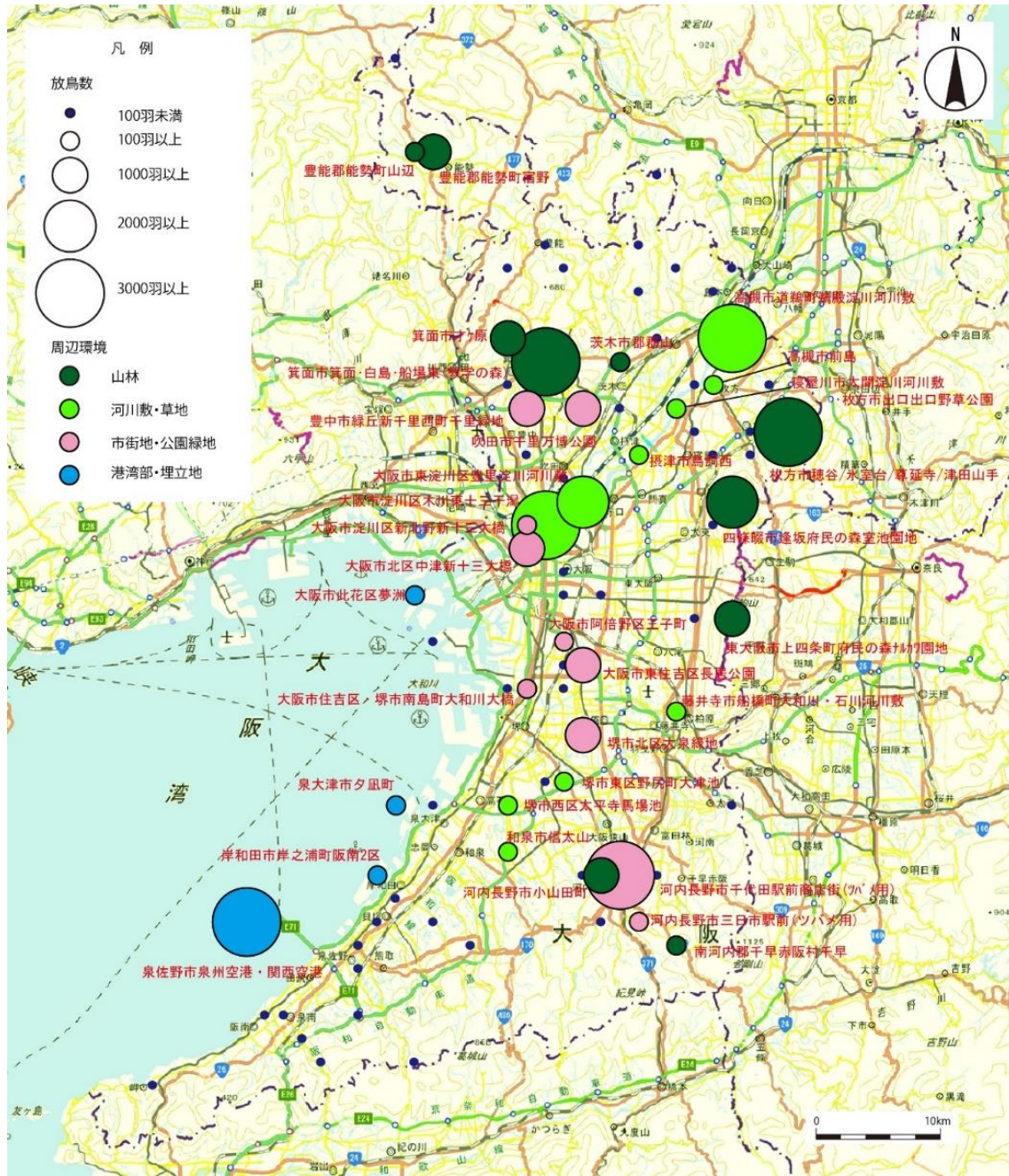


図 100羽以上の放鳥数を有する網場の分布と環境

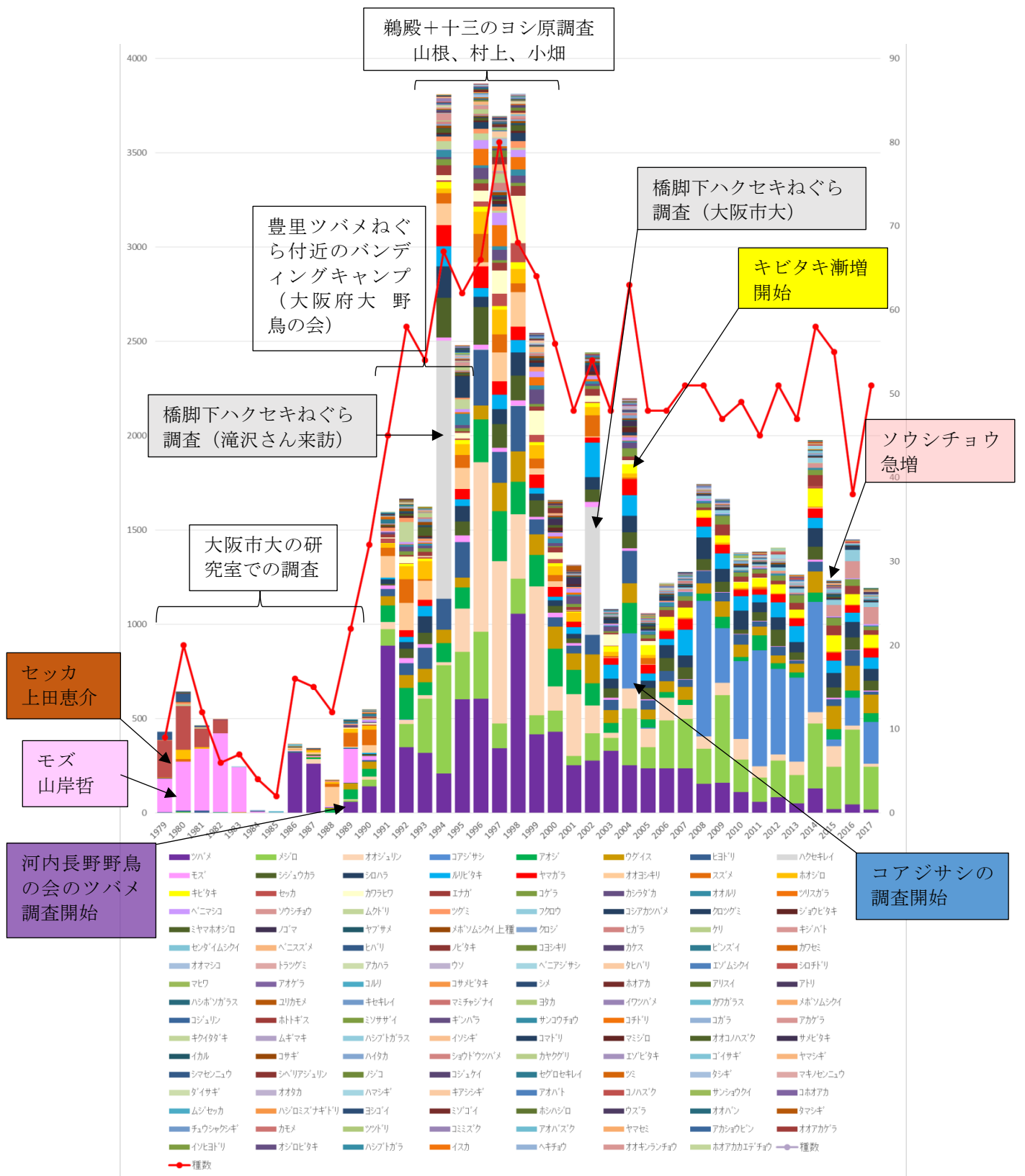


図 淀川口 2 級ステーションにおける経年的放鳥状況の推移 (全種)